

民主主義たる政治とは

——自民政権復帰と小選挙区制を考える

五十嵐 仁（法政大学大原社会問題研究所教授）

「ブログ 五十嵐仁の転成仁語」—掲載2013年1月10日（木）

「以下の論攷は、『しんぶん赤旗』2013年1月9日付に掲載

されたものです。」

総選挙では自民党が圧勝し、政権への復帰という結果に終わった。これを民主主義の政治とは何かという視点から検討したい。

民主主義とは民意に基づく政治であり、民の意思を尊重し、民の意思をねじ曲げず、民の意

思に従うというものである。その際、何よりも必要なのは、その意思が正しく国政に反映するということでなければならぬ。政権交代が実現したとしても、それが民意を歪めたり逆転させたりした結果であれば、このような政権交代も民主的なものではない。

「殺された」民意 過半数を超える

現行の選挙制度は、このような民主主義の要請に反する最悪の制度である。今回の総選挙も、民主主義に反する小選挙区制の害悪をくつきりと示した。

第1に、旧太陽党の日本維新の会への合流、日本未来の党の直前の旗揚げのように、小選挙区制での当選を目的に一種の「選挙互助会」が結成された。理念や政策の違いを曖昧にした合従連衡は、政党のあり方の歪みが投票以前に生じていたというべきであろう。

第2に、投票そのものもゆがんでおり、民意が正しく反映されていない。自民党は小選挙区において4割台の得票率で約8割の議席を得た。前回より得票が減少しているのに175議席も増やしている。まるで「手品」のようなカラクリによる虚構の勝利にすぎない。

第3に、議席に結びつかない「死票」という形で民意が切り捨てられている。小選挙区で共産党に投じられた470万票を含む約3730万票が議席に結びつかず、死票率は56%となった。制度によって「殺された」民意が過半数を超えるなど、異常というしかない。

【論巧】民主主義たる政治とは

間違いをただす抜本的改革こそ

誰でもが決定に参加できるのが民主主義である。そのための選挙で、民意が歪められたり、半分以上の民意が無視されたりした。代議制民主主義の根幹が失われているのである。「自分の声が正しく代表されていない」との不満が高まり、官邸前での脱原発行動のように、直接民主主義への欲求が強まるのも当然だろう。

選挙は議会への代表を選ぶ行為である。小選挙区制はそのプロセスで民意を集約しようとする。しかし、民意の集約は議会の役割であり、そのために民意の正確な縮図を作るのが選挙なのである。両者の役割を取り違えたところに間違いがある。

このような間違いを正し、議会制民主主義の機能を回復することが、本来の政治改革である。比例代表区の定数を削減して小選挙区制の比率を高めるような逆行を許さず、比例代表制的な制度に改めるための抜本的な改革こそが望まれている。それによって、民主主義の名に値する政治を実現できるかどうかだが、今、問われているのである。